

2-11 枝はどのように種類分けされますか

- ① 1次分枝と2次分枝
- ② 主枝と分枝
- ③ 栄養枝と結果枝

草型を形成する枝について、少し説明したいと思います。落花生の枝は発生順、発生位置や機能に基づいて種類分けされます。

まず枝を発生順に分類したのが①です。1次分枝が最初に発生した枝、1次分枝の節から発生したのが2次分枝、2次分枝の節から発生したのが3次分枝というように種類分けします。2-10で述べたように早生の在来種(亜種ファスティギータ)は枝数が少ないのですが、これは2次分枝が発生しにくいからです。一方、晩生の在来種(亜種バージニア)は3次分枝まで発生するものもあり、枝数は多くなります。

次に②の主枝と分枝ですが、これは枝の位置関係での種類分けです。落花生の場合は、早生種、晩生種を問わず既に種子中で中心部として伸びる主枝とそのわきから伸びる分枝の発生が認められ、絶対的な位置関係になっています。一方、果樹の場合のように、栽培者の考えで生育中の枝を主枝や亜主枝、側枝等と名付け取り扱うことは多く、その場合種類分けは相対的なものになります。

なお、落花生では、主枝を主茎と呼び、分枝のうち種子中で発生し最も長い2本の分枝を子葉節分枝と呼んでいます。子葉節分枝は、最長分枝と呼ぶ場合もあります。主茎と子葉節分枝は分類の基準となったり、充実した莢実が多く着いたりすること等から重要視される枝です。

最後に③の栄養枝と結果枝ですが、これは栄養生長する枝と莢実の着く枝という分類で、機能面から見た枝の種類になります。結果枝は生殖枝とも呼ばれ、その節に花や莢実が着く枝で、通常は節間が短く葉も着いていません。果樹でいう短果枝に似ていると言ったらよいでしょうか。栄養枝は節に直接は花芽を着けず、葉を茂らせてソースとして機能します。

以上のように、落花生ではいろいろな観点で、枝を種類に分けています。したがって、この設問の答えは、久しぶりの全てになります。枝をまとめて説明するにはこの方が良いのではと、思いそうさせていただきました。ご容赦いただければ幸いです。

ここに述べた枝の種類分けは、落花生を考える上では重要な見方です。①はソース能を考えるため、②は植物分類や莢実の着き方考えるため、③はソースとシンク関係及び植物分類を考えるためです。

植物分類について言えば、主茎(主枝)に結果枝が着生する場合を主茎着花と呼び、早生在来種(亜種ファスティギータ)の判定基準の一つとしています。また、子葉節分枝の1~2節目に結果枝が着き、その他の節にも結果枝が多く着くものも早生在来種の判定基準です。一方、晩生在来種(亜種バージニア)では、主茎に結果枝は着かず、子葉節分枝の1~2節目は栄養枝で、その他の節にも栄養枝が比較的多いという特徴があります。

正解 ①~③